

## 埋文コラム「発掘から見てきた食事風景」前編

### はし 箸状木製品

608年小野妹子が隋から帰朝した時、同行した隋使を歓迎するため宮中で饗応の宴が催されました。その際、中国のテーブルマナーを採用して、2本箸と匙を正式の食具として並べたのが、日本最初の箸の使用だといわれています。

箸の並べ方をみると、おもしろいことに平安時代末期までは縦に箸を並べ、鎌倉時代には現在のように横に箸を並べるようになったことがわかっています。逆に中国では、同時期に横置きから縦置きに変化しました。ただの中国の模倣ではなく、独自のスタイルを築いていたのかもしれない。

紫雲寺町の住吉遺跡（中世）は平成10・11年に発掘調査を行いました。この遺跡の土坑や井戸から大量の箸状木製品が出土しています。現在の割箸のように簡易的な使用によって、破棄されたものなのでしょうか。また、箸状木製品は中世に入ると齋串（祭祀の際に使用する細長い薄板）として使われたという考え方もあります。これらの箸状木製品は（神聖と考えられる）井戸から出土したことも踏まえると、齋串として奉納したと考えることもできます。



箸状木製品（住吉遺跡）

### しゃくし 杓子形木製品

縄文時代からすでに杓子・匙と思われる遺物が出土しています。多くは木製品で、かき混ぜる、器に取り分けるといった役割に応じた形をしています。

ご飯を盛るような杓子は「飯杓子」、汁物は丸形で中が窪んだ「汁杓子」（お玉）と呼ばれます。現在は、プラスチック製の物が多く出回っていますが、昔の飯杓子は板材を削り出して使用していました。また、汁杓子はホタテ貝・大蛤の貝に柄を付けて使用していました。正倉院でも人工的に手を加えた貝匙が60枚伝わっています。

板倉町の仲田遺跡では中世の井戸から杓子が2点出土しています。右上の写真は、1本ものの素材から細かな削りによって作製された汁杓子です。大きくカーブする柄に、円形に浅く削り出された身がついています。全体には黒漆が塗布されています。樹種は軽柔なヤナギ属を使用し、目的に応じた樹種選択を行っている様子がうかがえます。右下写真の飯杓子はスギの板材を素材としています。手のひらに収まるほどのかわいい大きさです。これらの杓子でどんな料理を盛分けていたのでしょうか。（今野明子）



汁杓子（仲田遺跡）



飯杓子（仲田遺跡）

参考文献 「もの与人間の文化史 96・食具」

法政大学出版局 山内昶 2000